

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370602

研究課題名(和文) 学習者ペアによる再話活動の相互行為分析に基づく読解過程の研究

研究課題名(英文) Study on the reading process by an interactional analysis of retelling by learner pairs

研究代表者

熊谷 智子 (KUMAGAI, Tomoko)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：40207816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語教育の読解授業への新たな提案を目指し、1) 学習者ペアによる再話活動の実践、2) 相互行為データの収集・分析、3) それに基づく授業改善というサイクルを繰り返すことによって、学習者の読解過程を分析した。その結果、再話という活動は、他者に理解を伝えたり、他者の理解と自分の理解を照合したりすることを通して、学習者の読解内容の整理・明確化を促すという知見を得た。また、実践・分析・改善のサイクルを通して、読解素材の選択や提示順序、各種活動の組み合わせについても具体的な知見を得、新たな読解授業の提案に必要な準備を整えた。

研究成果の概要(英文)：With the aim of developing new activities for Japanese reading classes, this study investigated learners' reading processes through repeated cycles of 1) a retelling activity, in which learners tell what they have read and understood to their pair partners and check and/or compare each other's understanding, 2) the collection and analysis of the retelling activity interactions and 3) improved class activities based on information from the analyses. The results showed the retelling activity helped the learners organize and clarify their comprehension. The cycles of classroom activities, analyses and improvement provided information that increased our knowledge about the selection of reading materials, the order of use of materials and effective combinations of classroom activities.

研究分野：談話分析

キーワード：日本語教育 読解 ペア活動 再話 相互行為分析 授業改善

1. 研究開始当初の背景

読解授業においては、認知心理学のスキーマ理論やストラテジー研究に基づき、学習者の内容把握・読解を促進するためのストラテジー指導が行われてきた。また、他者との協働を読解に活用する教室活動も行われている。しかし、特にペアワークやグループ活動では、実際に何が起きているのかを教師が十分に把握することは難しい。読解において、そもそも学習者が実際に何をどのように理解しているのかについては、十分に把握できていないのが現状である。

学習者の読解を教師が把握する方法に「再話課題」があり、日本語教育でも学習者が互いに自身の文章理解を説明し合う活動が行われている。また、そもそも読解を、読んで理解する自己完結的過程でなく、理解内容を表現することでさらに深化させる過程と捉える考え方もある。

日常生活で私たちは、読解内容を他者と共有、確認、議論し、その過程で理解を深め、知識や情報の再構築を行っている。本研究代表者らは、このような日常の活動に着目し、読解を「読んだことから内容を再構築する過程」と捉え、「読んだ内容を相手に話す」というペアによる再話活動を試みた。そして、中級レベルの読解クラスにおいて再話のペア作業を録音し、学習者がどのように理解しているのかについて探るべく制度的談話の分析手法を活用した談話分析を行った(木谷・熊谷・小河原、2011)。

分析の結果、学習者がペアで再話する際には、単なる再生だけでなく、様々な相互行為が起きることが明らかになった。そこでは、(1) 読んだ内容の再生、(2) 再生以外のこと(語の意味の確認など)の2種類が見られ、各々に数種のパターンが観察された(小河原・木谷・熊谷、2012)。時には、内容についての「質問-回答」を相互に役割を入れ替えて繰り返す形も見られた。こうした「質問-回答」などは、パートナーの存在があってこそ可能になる理解の確認、整理、明確化である。

再話のやりとりにおいて互いに質問することは、学習者の理解を問うべく教師が質問を行う場合よりも、質問を考えながら読むという主体的・能動的な読み方への変化につながる可能性がある。同時にこうした相互行為は、ペアが各々素材を読みながら情報のまとめりや内容の構成をどのようにとらえていたかを垣間見る手がかりともなる。(木谷・小河原・熊谷、2012)

しかし、再話のし方は同じ学習者でも内容理解の程度、パートナーの日本語レベルや読解に対する学習観の違い、素材の難易度・構造・内容等によってその都度変化する。それらの変数を踏まえつつ、一人でなくペアで行うことでどのような再生や相互行為が起こるか、より豊かな再生のためにどのような相互行為があり得るかといった観点からさら

にデータを収集し、分析を進めていくことで、新たな読解授業の可能性が広がることが期待される。

2. 研究の目的

日本語教育の読解において、そもそも学習者が実際に何をどのように理解しているのかについては、十分に把握できていない。そこで、学習者ペアによる読解後の再話活動に見られる相互行為を収集、分析することによって、学習者の読解過程、すなわち読んだことから内容を再構築する過程を明らかにする。その分析結果をもとに改善した読解授業を対象として、さらにデータを収集、分析し、授業改善を繰り返すことにより、新たな読解授業のあり方を提案する。そして、教室における相互行為、教室談話を分析する手法を用いた授業改善・授業研究の発展を目指す。

3. 研究の方法

文献研究を通して、本研究における読解の定義、読解授業、再話活動の位置づけを整理し、明確化した。同時に、これまでに収集した学習者ペアの再話活動に見られる談話を分類し、各学習者の内容理解の程度、パートナーの日本語レベル、素材の難易度・構造・内容等によってどのような再生や相互行為が起こっているか、より豊かな再生のためにどのような相互行為があり得るかといった観点から分析した。分析したデータを踏まえて読解素材の選択、再話活動の手順等の授業改善を行い、新たな読解授業として実践し、データを収集した。このプロセスを各年度において繰り返し、学習者の読解過程を明らかにし、新たな読解授業のあり方を提案した。

4. 研究成果

(1) 学習者の読解過程

再話を読解の教室活動として活用するために、実際にペアで再話する際に何が起きているのか、それが理解した内容の再構築とどのように関わっているのか、再話活動における学習者ペアの相互行為を分析した。

その結果、学習者はお互いに読んだ内容を述べ合いながら二人で1つの内容を再生していた。この間、学習者が再生する場合には、自分の理解を相手に伝えるために何らかの表現に置き換えたり、まとめ直したりして何度もストーリーにアクセスすることになる。さらに相手の再生を聞く場合には、自分とは異なる表現による内容を自分の理解と照合したり、相手の再生の正しさや再生されていない部分を考えたりすることになる。

このような過程が再話の進行に伴って繰り返されることによって、単に文章を読んで理解するだけでなく、何度も、かつ多様な形で自分の理解にアクセスすることになり、その結果として読んだ内容をペアで再構築する過程が読み手の理解を深めることにつながる可能性があることが示唆された。

(2)新たな読解授業のあり方

(1)で示唆されたことは、学習者がクラスで一斉にテキストを読んで、内容把握を問う教師の質問やテキストの設問に答えるような教師主導の読解授業とは異なり、ペアで再話することによって学習者自身が自分の理解に応じて、自らの理解を相互に確認できることを示している。つまり、ペアによる再話は教室活動として手順をさらに工夫することにより、読解授業において素材に対する学習者の理解を深め、多様な素材に対する再話を繰り返すことで読解力につながる可能性がある。

(1)の再話活動は、これまで素材ごとに概ね以下①～⑤の手順で繰り返し行ってきた。

個人の読み作業(3分)

400字程度で、辞書を使わずに概要が理解できるレベルの素材を使う。

ペアでの再話(約5分)

「読んだ内容を、その内容を知らない人に話す」という想定で、再生中は素材を見ないで話す。

内容理解確認質問への回答

教師は各ペアの活動を観察し、理解や回答を確認する。

クラス全体での内容確認

素材の音読と内容理解の確認を行う。

全体ディスカッション

素材ごとに学習者の興味関心に応じて行う。

これまでの手順では、学習者は「ストーリーを読んだ後に素材を見ない状態でそのストーリーの内容を知らない人に語る」という設定以外、全12回の授業中素材を代えるだけで各自自由に再話をしてきた。そこで、まず再話の意義を「理解したことを相手に伝えることで理解した内容を整理することになり、それによって文章の理解が深まる。さらにそれをいろいろな素材で継続し、蓄積することで読解力向上につながる可能性がある」と捉え直した。そして、理解した内容を整理することを促すためにペアによる再話を計画的段階的に取り入れた。

具体的には全12回の授業を4回ずつ3段階に分け、上記①～②部分を段階ごとに以下の(A)～(C)に変更した。

第一段階(A)

各自が3分で読む。一人が素材を見ないでキーワードを書き、そのキーワードを見ながら再生する。もう一人は素材を見ながら相手の再生を聞き、再生が進まない場合は次の発話を促す質問をするなど、不十分な再生にならないようにサポートする。その際に素材にある答えは言わない。

第二段階(B)

各自が3分で読み、キーワードを二人それぞれが書く。その後、素材を見ずに自分で書いたキーワードだけを使ってどちらかが再生を始め、お互いに助け合いながら二人で再構築する。

第三段階(C)

各自が3分で読み、キーワードを書かずに相手にどのような話を伝えるためにブレインストーミングを1分間行う。その後、どちらかが素材を見ずに再生を始め、お互いに助け合いながら二人で再構築する。

さらに、毎回授業中に読んで再話した素材を使って、「内容を200字以内で要約する」「表やチャートが書いてあるシートに記入する」「QAに答える」など、宿題を課し、確認することで内容の整理を繰り返し促す。

以上から、再話では単に読んで終わったり、最初から文章を暗記して話したりするのではなく、ペアの相手を活用して理解した内容を頭の中で整理し、自分の言葉で再構築して話すということを各素材で繰り返す。こうすることで各素材についての理解が深まり、読解力を高めていくことができると考える。

現在、本研究によって提案された手順にそって再話活動を実践し、段階別に日本語レベル等の学習者の個人差、素材の難易度・構造・トピック等によってどのように再生され、相互行為が起きているのか、データを継続的に収集している。そして、分析結果を踏まえてさらに素材の選択や再話活動の手順等について検討し、授業改善を続け、より明確な形で読解活動を提案していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小河原義朗・木谷直之・熊谷智子、読解授業における再話 - 学習者ペア活動の相互行為分析 -、小出記念日本語教育研究会論文集、査読有、23巻、2015、5-17

〔学会発表〕(計2件)うち招待講演2件

熊谷智子、日本語学習者ペアによる読解後の再話活動、科研費「異文化コミュニケーションとスタイル」研究会(代表者:渡辺学)2014年9月6日、学習院大学(東京都豊島区)

小河原義朗、ペア活動を取り入れた読解授業、日本語教育学会研究集会第8回、2014年11月15日、盛岡大学(岩手県滝沢市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 智子 (KUMAGAI, Tomoko)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：40207816

(2) 研究分担者

小河原 義朗 (OGAWARA, Yoshiro)
北海道大学・国際本部留学生センター・准
教授
研究者番号：70302065

(3) 研究分担者

木谷 直之 (KITANI, Naoyuki)
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号：30397103